



シニアライフアドバイザー
松本すみ子

南アリア代表、NPO法人シニアワークスRyouma 21 理事長。シニアライフアドバイザー、キャリアコンサルタント。早稲田大学第一文学部卒業。団体・シニア世代の動向研究とライフスタイル提案、市場分析などを行い、講演・執筆など多数。著書に「地域デビュー指南術」、「55歳からのリアル仕事ガイド」など。

なく、石や炭などを置いて、その上にかぶせる。また、容器の中には割り箸を墨汁で黒く塗ったものを立てておく。これは脱皮棒だ。鈴虫は後ろ足を引っかけて、逆様になって脱皮することが多い。だから、脱皮するための縦の面がたくさん必要となる。黒く塗るのは、敵から隠れるために暗い所や影が好きだから。この脱皮棒は渡邊さんのオリジナルである。必要なのは費用もかからない。必要なのは



脱皮棒には鈴虫がずらり

飼育容器と中に置く炭か石、割り箸、餌のレタスクらい。1週間に2度ほど餌を取り換える。気温や暗さなどの環境も特別のことはい

芸のひとつも持っていないと

シンガポールや上海で海外赴任を経験した渡邊さんには、そこで学んだことがある。それは、日本人なら日本文化について語れる何かを持っていないとだめだということ。外国では、日本人なのに日本のことを語らない、語れないのは不思議に思われる。

上海での勤務時代、渡邊さんは相撲甚句を身につけた。上海の宮崎県人会に相撲甚句を得意とする人がいて、2年間教わった。相撲甚句は日本独特の節回しがあり、相撲自体も日本文化そのもの。外国人と接するきっかけとして格好の道具になったようだ。また、シンガポールでは盆踊りの太鼓を叩



上海昆虫市場にて



鈴虫の羽はハート型に広がる

らない。渡邊さんの部屋にはこの容器が23個、5千匹はいるとか。「6畳間だから、鳴きだしたら、もうり

いた。その縁で日本大使館とのつながりもできた。それと似たようなことが、定年後にもいえる。渡邊さんは60歳を過ぎたら、その人らしい芸のひとつも持っていないとだめだと言っ

た。会社以外の人間関係を作るためにも、地域デビューするためにも「芸」が必要だというのだ。人生100年時代といわれ、定年でいったん退職した後も、再雇用や再就職などで働くことが当たり前の時代になりつつある。すると、また仕事一筋の生活になりがちだ。趣味にも社会貢献にも関心を示さなままの人が多い。しかし、雇われる身であるならば、遅

かれ早かれ仕事は終わる。その後はどうやって生きていくのか。渡邊さんは仕事をしながらも、趣味から発展した社会貢献活動をして

いる。おそらく鈴虫の活動が、渡邊さんの定年前後の不安や存在感を埋める役目を果たしたのではないだろうか。それが今、一生ものの活動になっている。

「シンリンとは聞こえませんが。ゴ……（笑）」。それでも、ちゃんと寝られるようだ。鈴虫愛は、半端ない「ようだ」。

「鈴虫は羽がハート型に広がるんです。こんな虫はほかにありません。なかには際立ってきれいに鳴く鈴虫もいます」。仕事から帰れば、鈴虫の音色や姿に癒されているのだろう。「でもね、鈴虫は半年も冬眠しているので、その間は何もありません」と、いたづらっぽく笑った。

今の渡邊さんにとって、仕事と「上尾スズムシの会」の活動は同じ位置づけにある。共通項は社会への恩返し。どちらも当面、止めるという選択肢はない。続けられる限りは、やっていくつもりだ。

「上尾スズムシの会」の活動は同じ位置づけにある。共通項は社会への恩返し。どちらも当面、止めるという選択肢はない。続けられる限りは、やっていくつもりだ。